
男子高校生の魔法少女プリティサクヤ

ねぎとろ・ばずーか

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

男子高校生的魔法少女プリティサクヤ

【Nコード】

N3083Y

【作者名】

ねぎとろ・ばずーか

【あらすじ】

ごく普通の男子高校生だった朔也はひょんなことから魔法少女になってしまった。男なのに魔法少女となってしまった彼の運命はいかに！

※本作品はネタとパロディで構成されています。

(前書き)

パロディが多量に含まれます。そのようなものに不快感を覚える方はそつとタブを閉じるか戻るボタンを押してください。

俺の名前は日乃本朔也。ごく普通の男子高校生だ。いや、だった。遺憾ながら、本当に遺憾ながら今の俺はごく普通の男子高校生ではない。なぜなら俺は今、「魔法少女」だからだ！

「やべえ凹むわー。マジで凹むわー」

「何言ってるのさプリティサクヤ！ さあ早くその悪魔をやっつけるんだ！」

こんなことを言ってる思わずブチ殺……ブチ殺したくらいでは俺の気が済まないむかつく生物はキューノ。俺の肩の上にいる小動物……ネズミ？ だ。

「オーケーオーケー。まずはお前をブチ殺すってことでいいよな？ つーかブチ殺させるこの野郎」

「訳が分からないよ！」

俺はキューノに殺気を飛ばしながら大ジャンプ。ビルの壁に足をつけそのまま壁を走る。

ズドンッ！ さっきまで俺のいた場所に巨大な瓦礫が落ちてきた。いや投げられてきた。その先にいるのは3メートルほどの怪物。全身真っ白な二足で立つ爬虫類みたいなやつだ。実に気持ち悪い外見だ。キューノによるとこの怪物は悪魔らしい。

「何をやってるんだいマジカルサクヤ。よけてばかりじゃ悪魔は倒せないよ？」

俺は無言でキューノの尻尾をつかみ地面に向かって投げ捨てる。地面までは10メートルほどといったところか。無事ではすむまい。ざまあみろ！

「パートナーである僕を投げ捨てるなんてどうかしてるよ」

俺の肩の上でキューノが言う。うん。期待してなかったとはいえ何事もなく戻ってこられると凹む。

「あー凹むわー。凹みまくりだわー。つーかなんで俺がこんな目に

……」

さて、なんで男の俺が魔法少女として怪物と戦ってるのか。それは一時間ほどさかのぼる。

俺が学校帰りにコンビニで週刊少年ジャ○プを立ち読みしていた時のことだ。

「やっぱ週刊誌はジ○ンプだわ。サ○デーも好きだけど」

「ねえねえ」

「お、この漫画最終回か。来週から何が始まるんだ？」

「ねえ！」

「ほう。この作者の新作か。これは期待できそうだ」

「ちよっと無視しないでよ！」

ジャンプを棚に戻した俺がコンビニから出ようとすると、目の前にネズミがいた。コンビニって食品も売ってるんだぞ？ 衛生上どうなんだこれ？ そんなことを思いながら素通りし、コンビニから出る。

「おいこら無視しないでって言うてるでしょ！」

もしかしたらこの声は俺を呼んでいるのかもしれない。そう思っ
て声のほうに振り向く。誰もいない。

「あれ？ おかしいな」

「ここだよここ」

声は地面のほうから聞こえてきた。俺が下を向くとネズミがいる。
さっきのネズミだろう。

「……気のせいかな」

「気のせいじゃないよ！」

Oh……。どうやらこのネズミから声が聞こえているようだ。

「……なんか変な顔してるけど大丈夫かい？」

またネズミから声がした。大丈夫じゃないかもしれない。おもに俺の頭が。

「ねえ。ボクと契約して魔法少女になってよ」

魔法少女ときた。俺の頭はどうなっちまったんだ！？

「返事はいかエスで答えてね？」

さて、あまりの事態に混乱の極みにあった俺はここで思わずはいと答えてしまったわけだ。混乱してやった。返事なら何でもよかった。今は猛烈に後悔している。

次の瞬間、俺の視界が一瞬真っ白になった。

「な、なんだ!？」

俺は思わず大声を上げあたりを見回す。

気のせいか周りの人がみんな俺を奇異な目で見ている気がする。

俺は訳が分からないまま下を向く。

そしたらびっくり仰天！ 天と地がひっくり返るほどに驚いた。

なぜなら俺は桃色でフリルやリボンがたくさんついた、いわゆる魔法少女的な服を着ていたのだから。

「うおおおお おお おお おお おお おつ おおおお!!!」
「!?!?!?!?」

俺は奇声を上げながら一目散にその場から走り去った。たぶんその時の俺は光速を超えてたね。だって見た感じ長速かったもん（当社比）。そしてその辺の路地裏へジャンピングダイブ。

一目がないことを確認し、自分の服をもう一度見て見る。……うん。魔法少女的なアレだ。

「見間違いないじゃないか。ああああああああああ！？」

なんだこれ

[illegible]

「やかましいなあ。静かにできないのかい？」

「その声はさっきのネズミ！ まさかお前が原因か！？」

声のほうを向くとそこにはやつぱりネズミ。

「原因ってひどいいいようだなあ。ボクは魔法少女になってくれつて頼んだだけだよ? その頼みに君がはいって答えたんじゃないか」

「え？」

「え？」

無言の時間が流れる。あれえ？俺、はいって答えたっけ？ ↑
 答えました。

「ボクはキューノ。魔法の国の妖精さ。よろしく頼むよ。魔法少女マジカルサクヤ」

こうして俺は魔法少女になってしまった。そしたらいきなり目の前にあの怪物が表れて今に至ると言うわけだ。

ちなみにこの怪物との戦闘中にキューノから多少の説明をしても
らった。その説明は要約すると以下の通り。

魔法の国の悪魔がこの世界に事故で飛ばされてしまった。

悪魔は魔法で魔法の国に送り返せる。

しかし魔法の国の住人はこの世界では魔法が使えない。

そこでこの世界の住人に魔法少女になってもらって代わりに魔法を使ってもらおう。

その際の魔力は妖精持ち。

この場合、相性のいい相手としか契約できない。

どうやら俺は（運悪く）キューノと相性が良かった。

妖精と人間はお互いに一切の攻撃がきかない

こんなところだ。

「ところで、なんで魔法少女なんだよ？俺男なんだが？」

「何を当たり前のことを。魔法少女のほうがロマンがあるだろ？」

「死ねええええええええええええええええ！」

キューノの尻尾をつかみ壁に叩きつける。

「まったく、君は乱暴だなあ」

「死ねよお前マジで死ねよ死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね」

「そんなことより早く悪魔を倒してよ。なんか律儀にボク達の会話が終わるの待ってくれてるよ？」

怪物のほうを見てみるとそいつは棒立ちしていた。お、あくびした。怪物もあくびするのな。

怪物が大きな瓦礫を手に取る。そして爪で瓦礫をひっかき始めた。そしてひっかいた面を俺のほうに向ける。そこには「まだですか?」と書いてあった。

「言葉通じんの!？」

「あたりまえじゃないか。悪魔をなんだと思ってるんだい？」

恐るべし魔法の国。しかしあれだ。聞かれたからには返事しなければ。

「まだです」

怪物はまた瓦礫に文字を書く。「終わったら知らせてください」

「畜生、怪物いいやつじゃねーか！　どっかのネズミとは大違いだ！」

「ひどいネズミがいたものだね」

「テメエのことだよ！」

そんなやり取りをしていると一つの疑問が頭に浮かんだ。

「……そういえば、なんで怪物は俺のこと襲ってきたんだ？　いい奴っぽいのに」

「そりゃ本能さ。悪魔は魔法が食料だからね。こっちに來てから魔法を食べれなくておながすいてたんじゃないかな？　早くやつつけてあげよう！」

「ん？　食料なのになんでやつつける？」

「魔法による痛みが悪魔の食糧なんだ。つまり食料的DMだね！」

「食料的DM!？」

なんかもものすごい言葉が出てきたな。魔法の国の常識が俺には測りきれない。

「あ、そうそう全部終われば君も普通の人間に戻れるよ」

「マジで!？」

「マジマジ」

そうか、悪魔を倒せば元に戻れるのか。

「希望が出てきたぞ！　いよーっしやってやるぜ！」

「その意気だよプリティサクヤ！」

「その呼び方やめて！」

怪物が瓦礫を見せる「終わりました？」

「あ、はい終わりました。よいいくぞ！　って俺魔法の使い方知らないんだけど!？」

「簡単さ。技名を叫びながら攻撃すればいいのさ。技名は最初にマジカルとつければあとは自由！ さあやってみよう」

「よっしいくぜ！ マ・ジ・カ・ル・キイイイイック」

俺はそう叫んで悪魔に向かって飛び蹴り！

「あ、ちなみに魔法の使い方ってあれ嘘だから」

「なん……だと……？」

俺がそんな声を上げているときに俺の足の裏が悪魔に激突。悪魔は光となって消え去った。

「あれ！？ 消えてんじゃん！ 魔法使えてんじゃん！」

「そりゃ使えるさ。自動発動だもの。そうじゃなきゃ大ジャンプして壁を走ったりなんてできないだろ常識的に考えて」

「よくもだましたああああ！！ だましてくれたなああああ！！ お前最後までむかつくやつだなこの野郎！」

「最後？ 何を言ってるんだい？」

「はあ？ もう怪物倒したじゃねーか。……まさか、普通の人間に戻れるってのも嘘か！？」

「それは本当さ。………悪魔は全部で108匹いるけどね」

「えっなにそれこわい」

「さあ残り107匹。がんばっていこう！」

「だからまずはお前を殺させろおおおおお！！！！！！！！！！」

俺の不幸はまだまだ続きそうだ。

(後書き)

お読みいただきありがとうございます。

今回はギャグ小説でした。個人的にはパロディっぽいギャグ小説というのは書いていて楽しいです。テンションが上がっていないとかけないのが玉に傷ですが。

さて、魔法少女とは一体何を持って魔法少女というのでしょうか？ 魔法を使う少女だと範囲が広すぎる上に、イロモノをカバーできませんし。

私はそれが魔法少女である、とタイトルまたは作中で明言されているものだと思います。つまり明言されていれば男だろうと明らかに少女の適齢期を過ぎていようと魔法少女です。

……魔法少女って自称または他称の称号なのかもしれませんね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3083y/>

男子高校生の魔法少女プリティサクヤ

2011年11月8日03時22分発行